



みんなの水泳……日々徒然

インチョン2014 アジアパラ競技大会 見聞録 ～2020東京に向けて…徒然～



今回のクラス分けチーム

はじめに

今回は、8月にオランダのアイントホーフェンで開催された2014 IPC Swimming 欧州選手権大会で見聞きたことや感じたことをお伝えしました。今回は、インチョン2014 アジアパラ競技大会に参加して、見聞きたことや感じたことをお伝えしたいと思います。

インチョン2014 アジアパラ競技大会は…

10月14日から24日まで、水泳競技のクラスファイアとして、インチョン（韓国）で開催されたインチョン2014 アジアパラ競技大会に参加しました。爽やかな韓国の初秋…会場のバクテファン水泳場も爽やかで最高…でした。競技役員ユニフォームが長袖で、「えーっ!!」と同僚たちで驚いたものの、競技会場内も爽やかな状態…長袖でも汗かかない感じ…でした。実は、日本のプールのように通年で室温と湿度が常に高いのは海外のプールではそう多くありません。



アジア大会の競泳と同じ会場で、非常にきれいなプールでした。競技役員ユニフォームはアジア大会とアジアパラ大会ではまったく別だったようで、組織的にどう構成されているのかもわかりませんでした

今回の大会には、アジア41か国・地域から約4500名もの選手が参加しました。中国、韓国、日本がメダル獲得数ランキング上位を占めました。水泳では、24か国から約238名、メダル獲得数ランキングは、中国、日本、韓国の順でした。水泳しか見ていませんが、印象としては、ベトナムやミャンマー、インドネシアなど、これまではあまりメダルに縁のなかった国々が上位に食い込むレースを繰り広げるなど、全体の底上げが感じられた大会だったと思います。視覚障がいではウズベキスタンに強い選手が出てきていましたね。派遣選手数が少なくても、しっかりと上位に食い込む、といった感じでしょうか。

アジアの現状…

欧州選手権などと比較してみると、まだまだ水泳の普及もままならないだろう国があるということでしょうか。今回も、ある国の選手は、50m自由形でクロールで50mを泳ぎ切れず、最後の10mほどを平泳ぎに切り替えてやっとのことでゴールしました。平和な日本からは考えられませんが、近年まで戦争をしていたような国では、まだまだプールなどの普及は難しいのかもしれない。選手団に水泳のコーチが帯同していない国もありました。スタートでのフライングや平泳ぎのひとかきひとけり、両手タッチなど、基本的な競技規則の理解が不十分だと思われる失格も少なからずあり、コーチが帯同していても、まだまだ普及レベルから競技への移行に課題のあることが見て窺えました。宗教や信条から、FINA（国際水連）ルールに定められた水着になることが難しいことに起因して、女性のスイマーが参加していない国もあります。

入退水や介助

欧州選手権でもそうでしたが、S5やS6クラスの脊損選手でも、介助スタッフは自国のスタッフが1名ついてくるのが主でした。できる限り自分の機能を使ってレースに向かうような感じ、というか、普段から自分でせざるを得ない状況が多いのかもしれない。日本は2名のスタッフで入退水介助することが多いと思います。また、普段は自分で車椅子を操作している選手でも、レース入場時にはスタッフに押してもらうこともあり、丁寧で手厚い反面、「できることでも手伝っているね」という見方もありま

した。何が正しくて何が間違っているか、ということではないかもしれませんが、世界は広く、色々な人が色々な見方をしているのだな、とあらためて感じました。

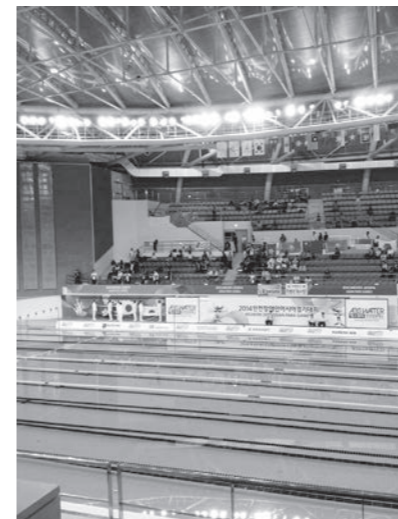
ちなみに、日本国内の大会で見られるような、「入退水介助ボランティア」は、海外の大会では基本的にはありません。切断の選手も、レース後、すぐに義足を装着することが一般的です。

クラス分けの様子は…

今回、私が業務にあたった肢体不自由のクラス分けでは、3日間のクラス分け実施で、合計で47名の選手をクラス分けしました。他の大会に比べると、初めてクラス分けを受ける選手が多い印象でした。また、自国にクラス分けに精通した人材がいなかったため、エントリークラスが大幅に違うケースも少なからずありました。スタートリストの作成等に影響を及ぼしますし、国費を使っただけの派遣ですから、できるだけ国内でより正しいクラス分けを受けることが望ましいのですが、各国ではなかなかそうはいかず、課題の多い要素でもあるようです。水泳のクラス分けでは、実際にプールで浮き姿勢や4泳法等を確認するのですが、英語のわかる人が帯同していない、クラス分けが選手村であると思っていた、そもそも水着を持っていない、などなど他の大会では遭遇しない「驚きの場面」にも出くわすのがアジアパラの現状です。スケジュール通りにクラス分けに来ず、好きなときに現れる、と言った“文化の違い”にもドタバタさせられる大会でもあります。

音楽や観客…欧州選手権との違い…

会場は、平日は小中学校や高校、幼稚園などからの観客があり、にぎやかな様相でしたが、一般客はそう多くないというのが正直な印象でした。音楽は、競技会期間中、同じ3～4曲がずっと繰り返してかかれていました。レースの様子をアナウンサーが解説することもなく、DJがいるわけでもなく、欧州などの大会と比べると、ぐっと静かでシンプルな雰囲気です。会場には競技役員や選手がアクセス可能なWi-Fiも設定されていましたが、環境はあまりよくなく、機能としては今ひとつ、という評判でした。クラス分け等でもIPCのデータベースにアクセスする必要があるのですが、今回は非常に困難な場面もありました。2020年東京に向けての強化だけでなく運営に関して、国際大会の運営にはどんなスタイルがあるのか、今後、日本もしっかり見聞きしていくことが肝要でしょう。



平日のスタンドの様子。観客席の前段は選手のスペース

お国が違えば…

ルクセンブルグの5角形プール…なぜ?

さてさて…今年、私が見てビックリしたコトやモノは、いくつかありますが、なかでも「驚きだけでなく不思議」なものを紹介します。五角形の飛び込みプールです。ルクセンブルグシティで遭遇しました。だからってなに?…と、思ったりもしますが…、でもなぜ五角形なのか…謎はなぞのまま帰国しました。



ボランティアと英語/あいさつ…

今回の大会のボランティアは学生さんが多かったような印象です。水泳会場の受付やクラス分けの受付でも、若い学生の方々が多数動員されていました。パラ水泳どころか水泳競技の運営に関する知識についてはゼロで、いちから説明してものを得ないことも多々あり、初日はかなりの混乱を伴いました。加えて英語を話すスタッフが限定されていて、英語はやはり運営面でもコミュニケーションのネックとなっていました。選手村では、高層マンション棟の1階に一部屋Wi-Fiが設定され、24時間利用可能な部屋があるのですが、私の滞在する棟では、夜の8時から翌朝の8時までそこを管理するボランティアさんも女子学生さんでした。英語を上手に話す人でしたが、「夜間に女子ひとり」は、なかなか他の大会の選手村では見かけない光景でもありました。



英語が話せないからか、スマホに視線を落とすまま、挨拶もしないボランティアさんも少なからずいたような…。英語でなくても挨拶はできないものか…何か残念な気持ちにさせられることもありました。2020年の東京パラリンピックに向けて…日本の課題も英語のスキルや外国人への対応である部分が否めません。本番までに何にどう取り組んでいくのか、私たちも、2020年に向けて…「頑張らねば…英語、恥ずかしがらずにコンニチワ…挨拶しよう!」です。